実行委員ごあいさつ（五十音順）

岡　幹絵

もう27年前になりますが、当時私が大倉山水曜コンサートの運営に携わっていることから港北区の芸術祭実行委員を依頼され、以来ずっと続き、今日に至りました。恐らく舞台の表方と裏方の両方を識る者として、ということが依頼された理由であったかと思います。その頃私は40代半ばで経験も浅く、諸先輩委員の方々の啓蒙的主旨やバラエティに富んだ内容の提案に感心しながら、自分なりに多文化を考慮して、少しずつ提案をしてきたように思います。めったに聴いたり観たりしたことのない物、知識として知ってはいても実際に鑑賞したことのない物、楽しく心が躍り晴々とした気分になる物等々、できるだけ多種多彩な文化芸術を体感していただきたいと思い企画をしてきましたが、どれ程の区民の皆様が心に留め楽しんでくださったのでしょうか。

文化芸術は日々精進努力をし、舞台に上る演者や後方で企画構成をして支える者だけでなく、それらを受け取る聴衆や観客がいなくては成り立ちません。そして、何よりも平和な世が大切です。長い平和な世が続いた時代には、優れた文化芸術が発展するということを私たちは歴史から学んでいます。

私は港北区に住んで60余年ですが、港北区は他市他区に比べて、お金では決して価値を計ることのできない文化芸術の振興に長い間尽力し、努力を続けてきた数少ない地域ではないかと思います。このことを心に留めて、今後も協力できれば幸いに思います。

五大　路子

港北芸術祭実行委員会に参加してから、もう25年が経つのかと感慨深い思いです。

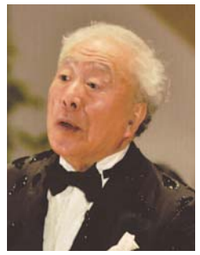
港北区に住む芸術家達が手弁当で集い、地域からの文化発信を夢見て、行政と共に生み出し、紹介して来た作品の数々は、きっとご覧になった方の心に一服の清涼剤、もしくは小さなパワーを差し上げることができたのではないかと思っています。25年という時間を掛けて、「地域からの文化芸術の創造」を実現することができたのではないでしょうか。

様々なジャンルで時代をリードされてきた方々とこの実行委員会で熱く語り合い、芸術溢れる港北区を夢見て活動して来た日々を懐かしく思い出します。中でも、今から5年前に消えゆく歴史の城・篠原城を人々の心に残そうと、実行委員の皆で現地を訪れ、議論を重ね、歴史を掘り起して、港北芸術祭から発信するオリジナル作品「まぼろしの篠原城」を生み出したことは、強く心に残っています。この作品は、「篠原城と緑を守る会」の方々をはじめとした多くの地元の方の協力を得て生み出され、消えゆくふるさとの宝物をこの街に生きる人々の心に届け、残したいという思いが詰まっています。この港北芸術祭実行委員会の活動は、どこにもない地域創造型の「港北スタイル」と呼べるのではないかと思います。

これからも、この街に住む人たちをはじめ、日本中に素敵なウェーブを起こしていけるよう願います。まさに“継続は力なり”です。

25周年に感謝の心をこめて。

中村　博之



多摩川を渡ると、そこは緑の多いアートの街・港北区です。どうしてこの街にはこんな薫りがあるのでしょう。いろんなジャンルの方々が、住んでおられます。そんな方々と25年勉強が出来ました。声楽家だけでも優秀な人が多いのです。手ごろなホール並の公会堂があります。でも、音楽をやる会場ではありません。この25年間の中で、最高の嬉しいことは、公会堂に反響板を付けてくださったことです。もう5、6年にもなりますが、この25年間の間、横浜市には本格的に歌えるホールが県民ホール（大・小）、県立音楽堂しかない時に、港北公会堂に立派な反響板が付いたのは、声楽家にとっても、他の方々、洋楽全般、ポピュラー音楽、邦楽、演劇、響きに関してステージに立つ人々には最高のプレゼントでした。今後は、この会場が立派なホールになることを願って、また、お手伝いできれば嬉しいことです。

平賀　三男

人は、社会で生活する上で様々な疑問が湧いてきます。疑問に対して答えを出すために、宗教、科学、芸術などの文化が存在していると言えます。芸術とは、簡単に言えば感動を人に伝えていくことではないかと思います。

私たち実行委員は、その役割を担っております。25年の間に委員会で企画・実施をいたしました鑑賞型事業公演は、全て「芸術」として価値ある内容だと確信しています。なぜなら、そこには「感動」があったからです。

港北芸術祭は、そういう意味でも大切な行事であり、事業でもあります。

私は、芸術祭も地域にようやく根付いた事業だと思っています。

これからも、港北芸術祭の更なる発展を切望し、実行委員の一人として続けられる限りご協力したいと考えております。

小林　辰雄

初めまして。29年4月より、港北区連合町内会長を受けました、小林辰雄でございます。

港北芸術祭、平成5年の発足以来25周年、おめでとうございます。港北芸術祭は、質の高い市内でも有数の会と伺っております。毎年の運営もとても充実していて、実行委員になった私としても今までの内容を汚さないように力を尽くして、少しでもお役に立てるように頑張りたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

塩坂　靖子

「港北芸術祭を立ち上げよう！」などと当時の港北区役所は物凄い事を思い付いたものです。三觜区長、関連の方々、担当の課の精力的な働き。しかもその思いが25年以上も続いているのですから驚きです。その流れの中に、実行委員として当初から居る私も幸せ者と言えましょう。

思い返せば、歴代の区長さん以下担当の職員の方々に懐かしさと感謝が加わります。

代々の座長さんを囲んでの実行委員会の素晴らしいお仲間。精力的で明るい委員の方々との出会いも嬉しく、毎回新しい企画を持ち寄りますが、予算の関係などで年二回公演に絞るのが難しい程でした。今後も楽しい企画を携えて集まることでしょう。

これまでの私の企画「人形劇」は、乙女文楽以来、現代人形劇センター（塚田千恵美理事長）から情報をいただいております。

「港北寄席」の方は、当初から落語界に明るい佐藤氏（サトー家具社長）が企画助言してくださり助かりました。にぎわい座の三遊亭鳳楽師匠の楽屋にも一緒にまいりました。

振り返りますと、私の企画は大きな力に支えられ、区の担当者との二人三脚の歩みでした。体の方は年相応で、衰えた聴力は筆記通訳のお世話になっておりますが、もう少し頑張って新しい企画ができたら良いと思っております。

25年間の港北芸術祭で、“眠れる区民”と言われていた港北区は少しは目覚めてくれたでしょうか。目覚めたとしたら嬉しいことです。

三橋　貴風

はじめにこの実行委員会に参加させていただきました折、やはり港北区にはこれほどの文化芸術の各ジャンルで実績を残された大家の先生方が多く住まわれているのだなという実感を得たことを覚えております。勿論、それは地元が東京に近く、交通の便が良いということにとどまらずに、この地が持っている雰囲気、つまり“気”がアーティストの方々に感化をしているのかな？などとも考えてしまいます。

当初は実行委員の方々それぞれが、独自のジャンルの情報を持ち寄り、年度毎の企画をバランス良く構成をするという方法論が中心であったと思うのですが、現在までは既に25年（四半世紀）を経た今、この実行委員会はよりThink Tank的な性格を発揮し出していることを強く感じます。それぞれの実行委員の方々がお互いの専門分野に対する理解を深めることによって、企画の発想に更に幅を広げ、異ジャンルとのコラボレーションとしての公演も増えて来ていると考えられます。

この実行委員会自体の進化による発想が、他とは一線を画している「港北芸術祭」の存在性に即ち反映しているものではないでしょうか？

けれども勿論、限られた少人数によるアイディアにはそれなりの限界もあります。今後、この芸術祭が更に発展して行くためには、区民の皆様方からの忌憚の無いご意見やご提案が不可欠です。将来、今以上に区民の皆様方と密着した「港北芸術祭」となるためにも、区民の方々との接点をもっと多く持ちたいものだと考えております。

山本　貞（元委員）

大倉山記

季節が来ると、「大倉山公園」に梅を観に行った、という話をご高齢の方からよく聞きました。戦前から、この梅林は知られていました。

私が現在の大倉山に来たのはもう35年も前になりますが、当時、梅林は人が訪れるでもなく、やや荒れた風情でした。一方、1メートル程もある雑草に覆われた大倉山記念館は、周囲を有刺鉄線に囲まれており、怪奇映画のドラキュラの館といった趣でした。来客が、「気味が悪い」と言いましたが、私にとっては好ましい環境でした。

しばらくすると区役所から連絡があり、港北区に居住する文化に関わっている人たちによる「港北芸術祭」といったものを立ち上げたい、とのことでした。初代会長は熊田正春さんで、多趣味で明るいドクターでした。そのうち、大倉山記念館は見事にリニューアルされて、港北区の文化的シンボルとして今日の姿になりました。

次の会長は、ピアニストの山岡優子さん。ピアノの道を極めた存在感のある方で、文化を考える会合には相応しい方でした。その跡を私が継ぎ、今はチェロの堀了介さんが新会長となり、進行役を引き継ぎました。

港北には本当に優れた芸術家がいて、わがまちの芸術祭の熱い議論を交わしています。

この「港北芸術祭」というものは、全て、企画側もそれを享受する側も港北区民が中心であり、常々、この区ならではの風景だと思ったものです。